

## 未来への扉 - 若者に寄り添う NPO のチャレンジ

## 第3部

## 「働く」を軸にした伴走支援



若者の独り立ち支援において、働くことに関する支援は常に大きなテーマです。児童養護施設や自立援助ホームに在る間にアルバイトで職業経験を積み、就職先を見つけて自立していくことが目標となります。しかしながら、認定NPO法人ブリッジフォースマイルが実施した「全国児童養護施設退所者トラッキング調査2021」によると、高校卒業直後に正社員として就職しても、2021年度入社者の12.5%が3カ月で離職、さらに2018年度入社者の58.5%が3年3カ月後に離職していたことがわかりました。また、退所時からアルバイトなどの不安定な就労状態の若者もいます。このように仕事が長続きせず、生活が不安定になってしまう若者が多いため、アフターケアで生活面を支えながら就労面もあわせて継続的に支援することが不可欠なのです。

社会的養護で保護されることなく、虐待やネグレクトなどの困難な家庭環境で育った若者たちへの支援においても、働いて収入を得て自立できるようにすることが常にテーマとなりますが、ハローワークで求人情報を探して就職するという方法ではうまくフィットしない若者が多くいます。

若くして早期に自立を迫られるがゆえに、自分に合う仕事や自分がやりたい仕事をよく考える余裕がないままに就職することで、長続きしないことがあります。また、虐待のトラウマなどによる精神的なしんどさや大人に対する不信感、対人コミュニケーションが苦手、障害、社会人経験が未熟など、若者たちが働くうえで抱える困難は人によって様々で、職場でひどく怒られたり、嫌な経験をして働くことが怖くなってしまふ若者もいます。

そこで、若者支援の領域では、若者たちの困難を理解したうえで受け入れてくれる協力企業を開拓して、見学、体験、そして就職へと若者をつないでいく取り組みが広がっています。また、若者支援団体の事業のなかで若者が携われる仕事を創り出し、支援者が若者たちと一緒に働き、育てるといった就労支援のモデルも生まれてきています。チャレンジする若者のその日のコンディションについてよく理解している支援者が一緒に働くことで、細かな配慮や声掛けができるのがこの取り組みの強みです。第3部では「働く」を軸に若者たちに伴走支援をしている3つの団体を紹介します。

## 伴走型の就労支援

困難な環境で育ち、困窮したり孤立しがちな若者たちへの就労支援は、単に求人情報や働き口を紹介することではうまくいきません。本人の適性や希望を踏まえたマッチングや、仕事体験と振り返り、就労継続をサポートするといった伴走型の就労支援が望まれます。また、若者たちの困難を理解して未熟な部分を寛容に受け止め、育ててくれる職場を増やすことが不可欠になっています。

## 支援団体一覧（掲載順）

法人名・施設名	事業名（採択年度）	所在地 （事業実施エリア）	掲載箇所
一般社団法人 SHOEHORN	中間就労を通じた、定点の提供 (21年度・22年度)	東京都 (東京都内)	p48 - 51
一般社団法人コンパスナビ	社会的養護出身者相談サイトコンテンツ作成 (21年度・22年度)	埼玉県 (全国)	p52 - 55
NPO 法人陽和	制度の狭間にいる若者達の自立支援事業 - 包括的支援で支え合う社会を目指して (22年度)	愛知県 (愛知県)	p56 - 59

## 若者たちの中間的就労を創り出すくつべらマン



## 一般社団法人 SHOEHORN

## 採択事業名

2021年度

中間就労を通じた、定点の提供

2022年度

中間就労を通じた、定点の提供

## 基本情報

🏠 東京都武蔵野市吉祥寺本町 1-11-21 セのおビル 4F  
BILLY' s CAFÉ 内

☎ 080-3727-8884

✉ info92shoehorn@gmail.com

🌐 <https://sites.google.com/shoehorn.jp/top>



## 団体紹介

SHOEHORN は、児童養護施設を退所した子ども・若者が気軽に立ち寄れる場として児童養護施設職員の武石和成さんと、元施設職員の武石由貴子さんご夫妻が 2015 年に飲食店を開業したのが始まりです。自治体や他の民間団体と連携し、就労・学習・居場所・食事の支援を横断・複合的に実施しています。現在は、①施設職員と一緒に社会人を撮影取材・編集・動画公開をする中間就労「取材事業（くつべらマンのプロにきく!）」、②世田谷区委託の「せたがやフェアスタート（居場所）事業」（2018 年～現在）、③すべての活動の拠点となる「飲食店事業（BILLY' s CAFE）」の 3 つの事業を主に実施しています。SHOEHORN とはくつべらのこと。若者たちが靴を履いて社会に出ていくことをサポートしています。



Column

## くつべらマンと一緒に働こうぜ！

COVID-19の感染が拡大した時期、若者たちの就労の機会が減少したほか、仕事の練習（お手伝いやアルバイト）等の機会もなくなりしました。就労自立に向けたキャリア形成のモチベーションの維持、構築には、人と会うことを通した小さな経験の蓄積が不可欠ですが、そうした機会が著しく失われてしまいました。そこで、当助成金を用いて、SHOEHORNでトライアルし始めたばかりの取材事業（動画「くつべらマンのプロにきく！」制作）にこうした若者たちに携わってもらうことにしました。この動画は、施設にいる子どもたちが様々な仕事を知るきっかけになることを意図したものです。

動画制作は当初、大人が制作・取材を企画し、希望する若者が補助として参加するというものでした。撮影取材時には参加する若者一人一人が役割をもち、仕事にあたります。カメラやマイクを持つ担当、インタビュー、時には出演を担当する人もいます。くつべらマンというオリジナルキャラクターの被り物や衣装はSHOEHORNのオリジナルで、家族から居場所を秘匿しなければならない被虐待経験のある若者たちも被り物を使うことで参加しやすいようです。

こうした取材経験を積むなかで、若者たちのなかから、「次はこうしたら良いんじゃないか」など考えて動いたり、提案してくれる人もでてきました。施設職員である武石さんなど身近な大人と一緒に撮影取材に臨む当事業は、安心感と面白さがあり、参加を希望する若者は2年ほどで増えました。また、この取り組みは、いわゆる中間就労のようなものですが、就労体験やボランティアではなく、賃金の発生する「仕事」として参加するため、若者たちは意欲的に取り組んでいるようです。2022年に実施した取材では、一取材につき、4～5人の若者が参加しました。繰り返し参加することで、いろいろな役割を経験し、取材前の準備や、取材後の編集作業に関わる若者も増えてきています。

また、取材を受けた企業がこの取り組みに共感し、取材先となる他の企業を紹介してくれたり、企業紹介動画の制作を有償で依頼してくれたりというつながりも生まれました。



Column

## 体験学習型の取材プログラム

2020年度採択から3年続けて当助成事業を活用し、定期的に取材活動を実施することができ、若者たちとの関わりが密になることで若者の新たな課題が見えてきました。若者たちはアルバイトやスポット派遣などの仕事をしたりしますが、長期的なキャリア形成に結びつきません。その背景として武石さんは、厳しい家庭環境での生い立ちや社会経験の乏しさ等の影響があるのではないかと考えました。

そこで2022年度採択事業期間（2023年4月～2024年2月）に企画したのが、体験型の研修を取材することで、参加した若者が研修にチャレンジし、スキルアップを図るというものです。取材チームの若者にとって、もっとも必要だと思われる基礎技術をリストアップし、該当する分野のプロに有償で出演を依頼し、体験学習型の取材プログラムを組みました。単に仕事として取材に参加するだけでなく、体験することでマナーやスキルを具体的に学ぶ場、あるいは資格取得のきっかけにもなりました。動画編集のスキルをアップしたいと意欲をもつようになり、定期的にSHOEHORNのカフェに来て編集作業をする若者が増えました。



Column

## 定点

SHOEHORNのカフェに来て取材の企画会議に参加し、支援スタッフと仲間たちと取材活動を行うことをSHOEHORNでは「定点の提供」とよんでいます。定点を拠点に、若者たちが社会参加の経験を積み、就労自立や進学、あるいは公的機関に相談して生活課題を解決することなど、次の目標にむけたスモールステップを重ねていくことを目指しています。この延長線上に、長期的な視点に立ったキャリア形成があるのです。

当事業の中間就労を経て、安定的な雇用を求めて求職活動を始めた若者、これまでチャレンジしたことがない業種に目を向けるようになった若者もいます。しかしながら、実際に就職するところまでにはなかなか結び付かない難しさがあります。



Column

## 社会の先輩から後輩へのエールチケット

若者たちが企画会議や編集作業、あるいは個別相談のためにやってくるカフェは、一般客にもオープンにしており、自分自身と「次世代の若者」のための2人分のドリンクチケット、エールチケットを販売しています。「次世代の若者」とは取材事業に参加する若者や、SHOEHORN スタッフが必要と判断した就労前の若者です。次世代の若者に何かをしてあげたい、という社会の先輩の気持ちと、独り立ちに向けてチャレンジしている若者を、一人対一人でつなげる寄付の仕組みです。



社会の先輩から後輩へ、エールチケット。



Interview

## 取り組みのなかで大事にしていること

**武石 和成さん：**

路上生活で公的支援に結びつかない若者のことを、関係機関にケースカンファレンスに出したところ、精神科医の方に、定期的に来て話を聞ける、人生における「定点」が必要という話を伺いました。それがカフェの原点であり、取材事業でも、定期的に来て仕事や手伝いの話をする中でうまくいってないこと、お金の困っているという話などが聞けるようになるので、「定点」の1つと考えています。そのうち、だんだん家族ができたり、仕事がうまくいって、いわば2次的な定点が必要なくなるのだと思います。

その中で大事にしていることは、3つ。

- ①「児童理解」＝自分の経験ではなく彼らの側に立って理解し共感し傾聴すること。
- ②「自己覚知」＝支援者は自分の方が上と思いがちだが、自分もでこぼこのある人間であることを自覚し、こどもに伝えるようにしています。
- ③「利用者満足」＝私たちは自分たちの経験から正解を出しがちですが、本人に納得感があるかどうかを重視し、私たちはこうしようと思っているのだけど、どう思う？と必ず聞くようにしています。

**武石 由貴子さん：**

個別対応がとても大事だと思っていて、人によってできることが違うので、取材などで作業があるからこれをやってね、ではなく、本人の経験や得意なことを配慮して、やってみるかどうか確認して、やってもらうことを大事にしています。一人ひとりの違いを意識するように心がけています。



Interview

## 支援が生かされたと感じるとき

**武石 和成さん：**

月並みですが、若者から肯定的な評価をいただいたときです。最初のきっかけとなった路上生活になった子は、具体的な支援をしなかったのに自立していきました。「話を聞いてくれたことで自分が何を考えたいのか目に見えてくる、それをやってくれて良かった」と言われました。それが原点でした。この事業を始めてからは、「参加して仕事を見つけた」、「自信をもてるようになった」など、助かった、と表情や言葉、身振りで伝えてもらった時にやっていた良かったな、と感じます。

それから取材の次のステップを見たとき。例えば、取材に応じてくれた会社で雇ってくれた、応じてくれた人に個別で相談した、など自分たちの手を離れて次に行くのを見ると自分たちがそのためのステップになったと思えます。

(支援が生かされたと感じるとき：続き)

武石 由貴子さん：

次のステップに進んだとき、アルバイトをしたり、面接をするなど、自分の生活に重きをおいているのを見ると中間就労がいきたなと思います。また、自分のできていないところとか、悩みを打ち明けてくれて、距離が近づいたときに、関わりつづけたことで、ようやく困っていることを聞けるような関係になれたんだな、と感じます。そんな時は、今までの支援が生かされたのかなと思います。



Interview

## 助成金があったからこそできたこと

まず、1点目は毎月1回継続してできるようになったことで色々な人から声をかけられるようになり、また、「今後も含めて毎月1回やっています」など企業や若者に案内しやすくなり、発展しやすくなりました。2点目は、定期的に行えるので若者の頭に入りやすくなり、「次はいつですか？」と聞いてきたり、初めて会った若者にも月一やっているからと案内できるようになり、参加率がアップしました。失業や引きこもりなど社会に所属していない子と定期的に関わることで、つながっていられ、トラブル、悩みの時など接点をもって次のステップに進みやすくなりました。例えば、その日暮らしのアルバイトをしていた子が長期就労に向かったり、バイトでの失敗の繰り返しのステージが短くなって成長を感じられたり、手帳の取得につながった子もいます。3点目は外部の協力者に人件費を払えるので、技術的に関わってくれる人が広がり、インスタ、TikTok など、動画の表現の方法が増えて、協力の輪がすごく広がったと感じます。

### 担当者インタビュー

## 若者支援に関わることになったきっかけ・動機

武石 和成さん・由貴子さん  
一般社団法人 SHOEHORN



和成さん（代表理事）：

二人とも児童福祉施設で働いた経験から、退所後路上生活になり、公的支援につながらない実態を知り、要件がいらぬ、無期限で関われる、横断的に関われる普通のカフェをしようということになり活動がスタートしました。学習支援、相談などでお店を利用してもらおう中で就労など日中活動のスマールステップとして中間就労のニーズが出てきた時に、社会人の方から協力できることはないか、と声をかけていただき、直接かかわるだけでなく、強みを生かしてもらおう形で若者からの専門的な質問、働くことや法律に関して取材する事業を考えつきました。その際、協力企業から動画制作費として支払うので事業にしたらと言われ、若者が仕事として取材する「プロにきく」という事業が始まりました。

由貴子さん（カフェ店長）：

児童養護施設職員の時と違って、要件のないただのカフェだと、関わっていた若者が来てくれてまた会うことができるので、細く長くかかわることができる拠点はいいなと思ったのもカフェ設立のきっかけです。

## 若者の若者による若者のための情報サイト制作バイト



## 一般社団法人コンパスナビ

## 採択事業名

2021年度

社会的養護出身者相談サイトコンテンツ作成

2022年度

社会的養護出身者相談サイトコンテンツ作成

## 基本情報

埼玉県さいたま市浦和区高砂 2-5-1 KOMON7F

048-815-4111

[contact@compass-navi.or.jp](mailto:contact@compass-navi.or.jp)
<https://compass-navi.or.jp>


## 団体紹介

コンパスナビは、一般社団法人青少年自助自立支援機構として2015年に設立、2021年5月から現在の名称に変更しました。社会的養護の下で生活をしている子どもや生きづらさを抱えている若者たちが目標や生きがいをもって暮らせる社会の実現を目指し、独自事業として運転免許取得助成事業を実施しています。2018年より埼玉県から「児童養護施設退所者等アフターケア事業」を受託し、浦和駅前の一軒家で居場所・相談場所・交流場所クローバーハウスの運営のほか、就労支援、住居支援、生活支援も行っています。社会的養護関係施設、企業と若者たちの橋渡しをして就労支援を展開しているほか、社会的養護出身者の仲間づくりも行っています。



Column

## 若者のための困りごと相談ポータルサイト「なびんち」

クローバーハウスでは、児童養護施設育ちのブローハン聡さん（コンパスナビ事務局長）をはじめとする何人かのユースワーカーが若者たちと話したり、相談にのったりしています。社会スキルを十分に身につけないまま児童養護施設などを退所し、様々なことでつまずき、相談先を見つけられないでいるうちに問題が複雑化し、どうしようもなくなってからコンパスナビに相談に来る方もいます。

そこで、社会的養護の若者たちが困ったときに自分で何らかの情報を得られるようなwebサイトがあるとよいのではないか、と始まったのが社会的養護出身の若者の困りごと相談ポータルサイト「なびんち」の制作です。当助成事業の2020年度採択事業にて着手し、孤立感、借金、仕事上の問題、行政手続き、健康（妊娠）などに関する全国の相談窓口や支援団体の情報を掲載しているほか、支援団体に取材を行い、若者が相談機関を身近に感じて相談しやすくなる記事を作成し、2022年2月から公開しています。

「なびんち」Webサイト情報 <https://navinchi.jp>



Column

## 「なびんち」アルバイト

このサイトに掲載する相談窓口や支援団体への取材、動画編集、記事化要員として、ケアリーバーの若者たちにアルバイトで参加してもらうことにしました。こうして、COVID-19の影響で経済的に困っていた若者たちが収入を得られること、若者たちにとって就労訓練になること、そして出来上がったwebサイトが多くの若者たちの役に立つこと、という一石三鳥のプロジェクトが始まりました。

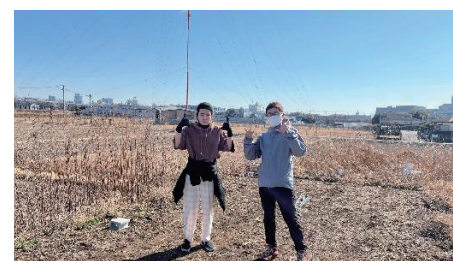
クローバーハウスに集う若者たちから希望者を募り、各回3～5人のチームを編成しての取材活動が始まりました。取材先へのアポ取りはコンパスナビの職員が行い、若者たちが取材を担当するので配慮してもらいたいことなどを事前に伝え、コンパスナビ職員が同行する形で取材を行いました。このアルバイトでの経験を通して社会スキルを身に付けてもらうという趣旨ですから、1年目と2年目は特に、様々なハプニングが起こりました。まず、打ち合わせや当日の集合時間に集まることが一つのハードルでした。時間に間に合うようにすること、遅れる時や休む時は連絡することは基本的な社会スキルとして大事だということを、失敗しながら学ぶ機会にしました。また、取材先で挨拶をし、趣旨を伝え、用意した質問をする、といった一連の流れを事前に打ち合わせのうえで実践し、社会スキルだけでなく仕事の仕方を学ぶのが「なびんち」バイト。職員が同行し、リードすることで、若者たちがこのような職業経験をすることができています。



富山県のいかわ若者サポステを若者5人が取材。はじめてホテル宿泊、飛行機、新幹線乗車の若者もいました。



宮城県東松島市の児童養護施設支援の会を若者3名が取材。震災遺構、野蒜施設見学、証言VTR視聴し、衝撃が強かったとの感想がありました。



取材先の取り組みを体験しての取材。この時は草刈体験をしました。



Column

## 広がる「なびんち」アルバイト

「なびんち」アルバイト経験者が他のケアリーバーを紹介してくれたり、遠方の取材先の支援団体利用者が「なびんち」アルバイトになったりと、埼玉以外でも10人余りの若者たちが「なびんち」アルバイトを経験しました。

また、取材を通してコンパスナビ職員と関係を築くことができた若者が生活困窮の相談をしてくれるようになり、食糧、衣料、生理用品などを緊急送付したこともありました。

3年目となる2023年4月からは、若者たちがより主体的に関わることにこだわり、「当事者による、当事者の情報サイト」作りをテーマにしています。22人の若者たちが3つの制作チームに分かれ、職員も入って毎月定期的にチームミーティングをもち、これまでに掲載した情報のブラッシュアップ、自分自身や仲間、後輩たちに必要な情報や知っておくとよい情報は何か、アイデアを出し合い、取り組んでいます。ケアリーバーに知りたい情報についてアンケートをとるアイデア、障害者手帳を取得して行政サービスを活用してきた体験を手記形式で後輩に伝え、自分に必要な公的サービスの活用を勧めようという企画などが出てきて、目覚ましい成長が感じられます。一方で、成育環境の影響による愛着障害から協調して活動することが難しいメンバーもあり、チームワークの葛藤が度々起こり、職員は一人一人のメンタルのケア、チームのケアも行いながら、事業を進める助言をしています。目標は、2024年春に社会的養護を巣立つ全国の後輩たちに「なびんち」サイトを各自のスマホにお守りとして持たせることです。



Interview

## 取り組みのなかで大事にしていること

幾多の躓きの結果、心掛けていることは、本人の自己決定です。方針をこちらが決めるとか、こちらがよかれと思ってプログラムを作ってそこに乗っからせるのは「角を矯めて牛を殺す」というようなことになってしまいますので。それと、自己表現をすることが不得手な子が多いので、言葉の一つずつ紡いでくれるのを待つことも大事にしています。そして、職員A、職員Bと若者という関係性も大事ですが、チームで支援をしているので、質の標準化も団体として大事なところと考えています。



Interview

## 支援が生かされたと感じるとき

一例を紹介します。T君と出会ったのは彼が高1の秋、高校退学で児童養護施設の退所を促され、寮付きの仕事を探してもらえないか、との相談からでした。児相に相談し自立援助ホームが空くまで施設退所を半年猶予。施設の近くで仕事が見つかるも、暴食で糖尿、脳梗塞で倒れ、手術の際に親の同意書取り付けまで2カ月かかるなど苦難との戦いが。引きこもり、ゲーム三昧。私たちからも距離を置くようになり、気がついたら自己破産。お金が無くて自暴自棄になりようやくSOSが来てクローバーハウスに在所、なびんちのアルバイトにも参加。生保受給からのリスタートです。今は給付金が入ったら目的ごとに4つのお財布に分けて自己管理の工夫も。水道光熱費の滞納分を支払うことができたときは、「今日、全部、全部払えたんです！！」と自己肯定感爆上がりでした。地域食堂へもクローバーハウスの若者たちと行き、小さい子どもとの付き合いが上手で、結果として他の居場所も見つけることにつながっています。クローバーハウスに視察のお客さまがある際には、率先して説明担当として敬語も使えるようにも。5年間目を離せず、上がっては下がりへの繰り返しは落ち着き、他の利用者との交流も滑らかになってきたように見えます。目下ここからの成長を見守っているところです。クローバーハウスが若者たちにとって、互いにエンパワーしあう場になっているのは、施設等を巣立った当座は規則の多い集団生活からの解放感で自由を感じるのですが、その後猛烈な孤立・孤独に苛まれますが、似た境遇で同様に孤独を感じた若者たちの居場所には仲間意識をもって集ってこられるからだと思います。





Interview

## 助成金があったからこそできたこと

高橋 多佳子さん：

この2年間で、同じような思いで取り組んでおられる全国各地のアフターケア事業所に取材を通して関係性を構築でき、ノウハウや情報の共有、交流など連携が密になったことが大きいです。県を越えての連携もできて、例えば、福岡「そだちの樹」では児童養護施設退所予定児童に向けてコンパスナビで金銭管理オンライン講座をし、好評でしたし、北海道の「いとこんち」とは数か月毎に交流も継続。関東に転居した若者の「アフターケアをよろしくお願いします」という広域連携の形も出てきました。また、助成金で作成した社会的養護出身の若者の困りごとポータルサイト「なびんち」では東京、埼玉以外の施設出身の若者も取材アルバイトになって活躍し、当事者活動の旗頭になるようなアドボカシー活動をする若者たちも育っています。幾度かの取材の中で、それぞれ役割をもち、互いに刺激しあい、共に創る実感を得ることが就労前訓練となり、一時保護所のアドボケートとして貢献する者、高卒認定・資格取得などに励む者、ひきこもりから動画編集活動で自己有用感を高め正規就労を勝ち取った者、保育士試験を3度目で勝ち取った者など、なびんちアルバイトの中で視野を広げ、成長して生きやすくなってきたという印象を受けています。

蟻田 晴彦さん：

社会的養護当事者の若者と何か一緒にしようと言ったとき、彼らにアルバイトとして仕事が発生し、お金を渡せて、ボランティアではなく、一緒にできたことはものすごく大きいことです。それは彼らの経験の幅を広げたり、支援者につながることもなりますし、何か一緒にする時、彼らの時間を削らない、彼らを事業遂行のパートナーとして交通費、時給として還元する、というコンパスナビの考え方にも合っていて、今回の助成金でないとできなかったと思います。

### 担当者インタビュー

## 若者支援に関わることになったきっかけ・動機

高橋 多佳子さん

一般社団法人コンパスナビ事務局



我が子が小学生のときの近所に住む同級生の家族の家財道具がすべて家の前のブルーシートに放り出されるということがあり、その家の子を2週間、自宅で預りました。以前ゴミ屋敷になっているそのうちに掃除に行ったことがあったので、衝撃的な経験でした。また、高校のPTA活動をしていた時に、子どもが学校に行かない、行けない背景を知る場面がありました。毎年、一クラス分が退学する高校で不登校は表面的な見え方であって、実際のところは、精神疾患の母親の通院に付き添ったり、夜間の対応をする中、だんだん学校に行きづらくなるなど、のちにヤングケアラーといわれることになる子どもたちの状況を知り、何にも力になれない無力感を感じていました。上手に生きることができない人たちに、自己責任や、努力が足りないといった言葉で片付けることができません。コンパスナビで若者支援することになり、子どもたちが学校に行けることをサポートしたいとずっと感じていた自分の思いとぴったり合って若者支援を始めました。そうした仕事に巡りあえたというわけです。

## 若者の「働く」を支える通学支援、企業・自治体連携、保護者への支援



## NPO 法人陽和

## 採択事業名

2022 年度

制度の狭間にいる若者達の自立支援事業 - 包括的支援で支え合う社会を目指して

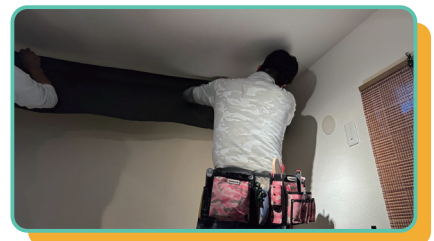
## 基本情報

🏠 愛知県名古屋市中天白区梅ヶ丘三丁目 1802-211

☎ 052-893-9899

✉ npo.hiyori8@gmail.com

🌐 <https://npohiyori.net>



## 団体紹介

陽和は、困難な家庭環境で家族からの支援がなく、制度の狭間において支援の手が届かない若者、子どもの最善の利益を追求しながら、若者たちが誰一人取り残されることのないよう寄り添い、若者たちが幸せを感じ、夢や目標が描けるような環境をつくることを目指しています。愛知県を拠点に、主に少年院を出た若者などの相談を受けとめ、就労や就学の支援、視野を広げる様々な体験の機会の提供、親子関係の改善支援などを包括的に行い、一人一人と未来の選択肢を一緒に探し、自立へのステップを歩む若者に伴走型の支援をしています。教育委員会や学校 PTA などで子どもとの関わり方の講演を行い、トラブルを未然に防ぐ活動も行っています。



Column

## その日暮らしに陥りやすい若者たち

陽和で支援をしている若者たちの多くは社会的養護関係施設や少年院で過ごした経験があり、被虐待や発達障がい、愛着障がいがありますが、施設出身者への公的支援を十分に受けることができていません。東京の「トー横」、名古屋の「ドン横」、大阪の「グリ下」など、家や学校に居場所がなく、お金もない若者たちが居場所を求めて集まる場所が注目を集めていますが、そうした場所で援助交際や特殊詐欺などのターゲットになってしまうリスクと隣り合わせです。

若者たちは親や社会から大切にされた体験や成功体験が少ないため、相手の気持ちを理解してコミュニケーションをとることが苦手で、学校や会社に馴染めなかったり、先の事を考える力が弱いといった課題を抱えています。中学卒業あるいは高校中退ののち就学できていないことから、仕事の選択肢が非常に限られ、学歴を必要としない建設業に偏ってしまい、興味や適性に合った仕事ではなく、長続きしないといった課題があります。そのため、勉強や資格取得、自立に必要な物の購入ができずに、その日暮らしの状況に陥りやすい傾向があります。

なかには親の元で生活する若者もいますが、本人が働くことができない状態が続き、保護者が非正規の仕事を掛け持ちするも、生活を維持すること自体が厳しくなり、困窮し、家族関係がさらに険悪になってしまうケースもあります。



Column

## 「斜めの関係性」を大事にした伴走型支援

陽和では、そんな若者たちが理解のある企業や学校で再出発し、成功体験を積み重ねられるよう、環境を整えてあげることがまずは大事だと考え、一人一人としっかり話をしながら、規則正しい生活習慣や自炊などの生活スキル、コミュニケーションをとる練習などをサポートしています。ここで大事にしているのは「斜めの関係性」です。指導的な関わりや同輩の横の関係とも違い、本人や親の苦しい気持ちをよく理解する先輩のような関係性で導いていくことを目指しています。

そのような関係性をベースに、陽和では当助成金（助成期間は2023年4月～2024年2月）を活用し、自立支援（面談、就学・就労に必要な物品・食料支援、就学・就労の継続支援など）、若者の選択肢を増やすための協力企業の開拓、新規相談受付の強化、保護者支援、研究者等との自立支援プログラム開発を行っています。



Column

## 就学と就労の支援

面談を重ねるなか、働きながら学校に行きたいと希望する若者もいます。そこで、陽和では通信制高校に進学し、高校卒業まで続けられるようにサポートしています。今年度、通学支援をしている若者はスクーリングなども順調にこなし、卒業に向けて歩んでいます。

ホームレス状態で相談につながった若者には、協力企業に仕事と住まいを用意してもらったうえで、会社に馴染めるまでコミュニケーションをとるなどして支援しています。生活道具が全くない若者もいるため、必要に応じて布団を買い揃えるところからサポートをしました。助成期間中に面談を重ねた若者は全員、協力企業等で就職またはアルバイトをさせてもらっています。また、中にはすぐに就労することは難しい若者もあり、ひとまず協力企業に住まいを提供してもらったうえで、生活保護の相談に行き、生活を整える支援を行っています。



Column

## 若者の選択肢を拡大するための協力企業開拓

若者たちを受け入れてくれる協力企業はこれまで建設業が多かったのですが、若者たちの興味や適性に合わせて様々な業種の仕事を提供できるように、パソコンを使った仕事など、協力企業を増やす取り組みを行いました。若者たちや家庭が向き合っている困難や孤立に向けた支援が必要なことなどについて啓発するイベントなどを通して企業に働きかけた結果、新規の協力企業が毎月増え、2023年4月から9月までの間に10社の企業と提携を結ぶことができました。

また、女子に紹介できる提携企業がなく困っていたところ、ユニバーサル志縁センターの仲介で地元自治体の重層的支援体制整備事業による就労支援ネットワークとつながることができ、選択肢が増えてきています。



Column

## 保護者のメンタル・就労支援も含めた家庭支援

陽和の支援活動を様々なメディアで発信したり、SNSを活用した相談ルートを設けたことで、若者だけでなく保護者からの相談も増えてきています。COVID-19の影響で保護者も収入が減り、精神的にも不安定になってしまい、メンタルクリニックに通院しなければならなくなったり、子どもに強くあたってしまうケースもありました。そうした家庭には、保護者の精神的なケアの他、生活設計や転職の相談にもり、陽和で提携している企業につないだり、役所での必要な手続きにつなげました。未成年の若者や保護者にこうした支援を行い、親子関係の調和を保つことで、助成期間中に保護者支援を行ったなかで、警察沙汰や児童相談所が介入するようなケースはありませんでした。

また、発達障がいなどの特性がある若者たちと保護者への伴走型の自立支援はニーズに対して支援者が少ないという課題感があります。そのため、陽和の取り組みをもとに、日本福祉大学の研究者や精神科医師などと共同で自立支援プログラムを開発することにしました。プログラムを開発したのち、それをういて支援にあたる支援者の育成を行い、各地で支援の輪が広がることを目指しています。



Interview

## 取り組みのなかで大事にしていること

支援者、行政は大人目線で物事を判断してしまいがちなので、子どもの目線、価値観を大切にしながら、支援という言葉もなるべく使わずに寄り添い、その子の夢や目標の実現に向けて伴走することを大切にしています。困難を抱えてきた子どもたちは過去の経験から大人を信用せず、大人に関わりたくない、心を閉ざしている子が多いです。親子関係が悪かったり、先生から否定され続けてきた子は、生きづらさを抱え、失敗が多いので、否定したり正論を言って心をつぶしてしまうということをせずに、どんなことにも寄り添い、心を許して話してくれるようになるよう、人間関係を構築しています。



Interview

## 支援が活かされたと感じる時

だいたいの子が失敗体験の方が多く、自分は生きている意味があるのかと、自分に対する価値をもっていない子、自暴自棄になって、自信がない子が多いです。そんな中で、提携している企業では、失敗が許され、小さな成功体験を積み重ねたり、スタッフ、支援者のたくさんの応援がある環境で、こんなに応援してもらって、やっと生きる価値を感じるようになった、と自己肯定感が上がり、生き生きしてくる姿を見るとき、関わってよかったと思います。また、親子関係を軸にサポートするうち、会話がなかった家族が調和していき、それぞれの温度感を調整し、本来の親子になって、食事や会話ができるようになったり、一緒にボーリングにいたり、親子関係がよくなって、子どもが変わった、と親御さんの声をきくとき、家族だけではできなかったことが自分たちが間に入ってきたことでできた、家族が笑顔になってよかったと感じることが多々あります。何も持たずに紙袋一つで社会に出てくる子がいて、それを知った周りの方が、マクドナルドのチケットを届けに行ってくれるなど、ご縁が重なり、応援されて、生きる力を取り戻していく、と感じます。



Interview

## 助成金があったからこそできたこと

渋谷 幸靖さん：

10代の子はお腹を減らしているのに、困窮している子はコンビニ弁当やカップラーメンしか食べてなく、ファミリーレストランで食事がとれると、久しぶりにおいしいものを食べましたと言ってくれます。普通に生活することすらままならない子が、助成金によって日常の普通の生活を体験できています。

自立準備金で、お米を炊くことができない子に炊飯器を貸与したり、親の援助を受けずに大学に行くことになった子にPCを貸与したり、当たり前前努力ができる環境にない子が、助成金によって当たり前前努力ができる水準になっています。本来は公的な支援を使えばいいのですが、現状はそこまで困難を抱える子たちが使える制度になっていないので、今は助成金を使ってだけしか支援できないことがたくさんあると思います。

林 ももこさん：

助成金を使って、大学の先生に当活動のプログラム化を検討してもらうことで、自分たちの活動を改めて見直すきっかけになりました。先生から陽和は、プログラムでなく、柔軟に活動している、とほめていただき、柔軟にやっているからこそできることがあり、プログラムでなく新しい形で試行錯誤してみる、とおっしゃっていただき、今後の活動にいけるかな、と思っています。

### 担当者インタビュー

## 若者支援に関わることになったきっかけ・動機

渋谷 幸靖さん

NPO 法人陽和 理事長



自分自身が10代のころから非行の道を歩み、鑑別所に入りましたが、当時は反省できず、さらに素行が悪くなり、24歳の時に留置所に入りました。スマホもない留置所の薄暗い世界にいるうち、だんだん自分を振り返るようになりました。自分は母一人、子一人の母子家庭で小学生の頃から、自分の不登校、非行などで母は何回も菓子折りをもって謝りにしていました。留置所にまた面会にきた母に会って、自分は親孝行の一つもできないカッコ悪い大人だと気付きました。そして、これから先、何が親孝行になるのか？唯一できることは、当時の自分みたいな人を減らすこと。それが親への償い、社会への償いと思いました。「NPO法人をつくる。」ノートに赤い文字で書いたのが25歳の時。26歳で社会に戻り、犯罪と縁を切ったものの、日々生きることは苦しく、10年後、非行少年を支援する愛知のNPOでやっとボランティアができるようになりました。そこで出会う子は当時の自分がそこにいるようでどの子も可愛く、また、保護者の面談で泣きながら自分を責める母親たちに出会って、人には見せなかった自分の母の辛さを思い、親孝行と社会への償いこそが自分の人生における使命である、とあらためて思うようになりました。